

編集後記

◆春や桜についての原稿がそろると、やはりうれしいものである。桜に特別な思いをもっていただけではない。が、雪国に戻ってきて五年もたつと、春がきて花が咲いたり虫が飛ぶこと自体が素晴らしいと思うようになった。梅も桜も沈丁花も同時に見られる！春は、なにか体の奥深くから力が湧いてくるような感じだ。短歌（和歌）や俳句に詠まれた桜はごまんとあるが、一つずつあげてみる。「ひまかた久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則）、「両の手に桃とさくらや草の餅」（松尾芭蕉）。

◆キリバス共和国のケンタロ・オノさんのお話を聞く機会があった（主催・河北町環境を考える会）。二月半ば、山形は雪がどつと降ったばかりだった。仙台から来たオノさんは「県境を越えようと、こんなに雪があるんだ」とびっくりしている。奥羽山脈、おそるべし。たしかに、公民館の玄関でお会いしたオノさんの出で立ちはスーツに革靴。雪道ではすってんころりんと転んでしまうような靴だった。

ケンタロ・オノさんは一九七七年、宮城県仙台市生まれ。九三年、十五歳でキリバスに行く。きっかけは「兼高かおる世界の旅」を見て南の島に憧れたからだという。その後、同国に住み、家族もできて、二〇〇〇年にキリバス共和国に帰化。一二年の大震災後、生まれ故郷の仙台に拠点を移し、活動している。一五年、キリバス共和国名誉領事となる。

太平洋に浮かぶ大小いくつもの島からなる赤道直下の国、キリバス共和国。海拔の低いサンゴの環礁が多く、近年の海面上昇により、国土の半数以上が水没の危機にあるといわれている。オノさんが見せてくれた美しい海岸線とヤシの木の風景は過去のものになりつつあるようだ。赤道性気候という本来は安定した気候のはずなのに、最近気象が極端になり、雨水の減少や魚が捕れなくなる、海岸線の浸食など、生活がおびやかされるほどの変化が起きている。水没というトツバルは話題になるが、キリバスはそれほど知られていない。「地球温暖化」「気候変動」ということばは、しばしば政治的に利用されることもあった。こうすればよいと簡単にいうことはできないが、ゆっくりもしてられない。実際にキリバスは、これまでにないほど大潮や高潮の被害を受けている。キリバスの現状を知った以上、ひとに伝え、みんなを考えていくしかない。

八月には、公民館より広い会場、河北町の「サハトベに花」において、ケンタロ・オノさんの講演会が予定されているそうだ。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 86号

二〇一七年六月二十三日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇一

info@muninokai.com